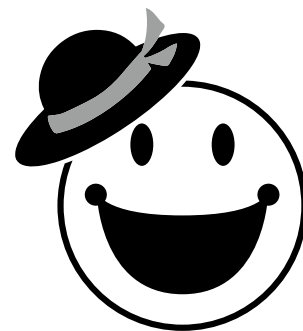


「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに

挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗

第8回

## やる気を出す（その5）

### 先生がもっと教えたくなる選手になる

#### ◆一流選手の指針 = 「選手力」

先日の静岡県ジュニア強化練習でのことです。閉会式が始まる前、選手らが整列してもおしゃべりをやめないで、前にいる先生方が「静かにしなさい」と何度も繰り返し注意していました。いざ閉会式が始まり、泊親会清水の堀川徹吾先生が講評で、「一流の選手とはどんな選手でしょうか？ さきほど、先生方に静かにしなさいと何度も言われている時点でみなさんは一流ではありません。一流の指導者とは、選手にやる気を出させ成績を出すことだとしたら、指導者が教えたくなるような、指導者のやる気を起こさせるのが一流の選手です」とお話しされていました。感銘を覚えるとともに、選手側からの視点が新鮮でした。

今月は、これを「選手力」と名付け、話を進めたいと思います。

#### ◆指導者がもっと教えたくなる選手

「先生は、〇〇君には一生懸命教えても、僕の方は向いて教えてくれない」「僕を選手に選んでくれない、強化練習にも呼ばれなかった」、など不満を持っている人もいます。しかし、皆さんは、先生方が教えたくなるような態度で稽古に望んでいるのでしょうか？ ただ、要求するだけでは相手は動いてくれませんし、自分だけに希望通りの指導を望むのも無理な話です。

- こちらの目を見てうなずきながら一生懸命に話を聞く
- 稽古中に積極的に質問したり、発表する
- 指導すると「ありがとうございました」とお礼を言う
- 稽古に休まず来る
- 「集合！」と言うと、いつも一番に駆け足で来る
- 困っている後輩がいると積極的に声掛けする
- 外で会っても、自分から挨拶してくる

- 注意した点を自宅で練習して直してくる

- いつも汗を流して全力で稽古する

など、指導者がもっと教えたくるように思わせるのも選手の實力ではないでしょうか？ こうした「選手力」のある選手は、指導者を自分の方に振り向かせ、指導の大半の時間を独占してしまいます。生徒は皆平等で分け隔てなく指導しなくてはならないのは大前提ではありますが、指導者も人間ですから、積極的な稽古への姿勢を見せられると、ついついそちらに目がいってしまうのは致し方ないことです。

#### ◆うなずきながら話を聴いてごらん

私が小学校三年生のときの話です。学校で授業中、先生がこちらを向いたとき、私と目が合いました。そのとき、なぜか私は反射的に二、三度うなずきました。すると、それからというもの、先生は私ばかりを見て授業を進めていったのです。次の日以降も、私は気が抜けなくなり、先生の期待に応えようと目が合うたびうなずきました。嫌でも集中して話を聴くようになりました。私はそのとき、先生の指導を独占したのです。

空手を指導するようになって、道場生によくこの話をします。「明日の授業でうなずきながら話を聴いてごらん。本当に先生がこっちばかり見て授業を進めるから」と。すると次の稽古で会った時、「先生、本当に、学校の先生が私ばかり見て授業していました」と嬉しそうに報告してくれるのです。

学校の先生も、前の晩、遅くまで授業の準備をしますから、それをうなずきながら一生懸命に聴いてくれる生徒の方ばかりを見てしまうのは当然のことです。

#### ◆指導力と選手力、鶏が先か卵が先か？

通常は、選手の成績向上などについて、指導者の「指導力」

が議論になりますが、このように選手側の態度に着目するのは斬新です。

しかし、「選手力」が無いのは本当に子どもに原因があるからでしょうか？「選手力」の弱さには、「指導力」も大きく影響していることを、指導者は肝に銘じなければなりません。「指導力」次第で、選手のやる気を引き出すことができるからです。この引き出された「選手力」がフィードバックして、指導者を再度奮い立たせ、もっと教えたい、どうしたらこの選手をうまくさせることができるだろうか？と真剣に考えさせます。「鶏が先か、卵が先か」のジレンマのようですが、この場合は、「選手力」ではなく「指導力」が先と断言できるでしょう。つまり、指導者も「だって、あの子はやる気が無いから」と諦めるのではなく、やる気を出させる、つまり「選手力」を育ててあげるのが本当の「指導力」ではないでしょうか？

### ◆小学生にとっての「母親力」の影響は絶大！

「選手力」を引き出すのは、両親の影響力も大きいのです。これを「母親力（もしくは父親力）」と名付けることにします。道場で指導者がやる気を出させても、自宅でお母さんがマイナスな話をするだけで、簡単に子どものやる気が削がれます。中高生と違って、小学生は幼いので、指導者よりも母親の言うことを最終的には信じます。

残念ながら、空手専門家の指導者よりも空手素人の母親の言うことを信じるのです。「試合なんか出なくてもいいよ」日

本一なんかなれるわけないよ」「先生は、〇〇ちゃんばかり選手にしてひどいね」「先生のやり方はおかしいから、試合のときはお母さんの言うとおりにやりなさい」など。このような言葉を、家で毎日のように聞かされていると、子どもは道場に行っても指導者に感謝の気持ちも湧きませんし、教えてもらおうという謙虚さも無くなります。

「母親力」が弱いと、子どもの「選手力」も落ち、結果、指導者は「指導力」を発揮できなくなるのです。「母親力」とは、子供に干渉し過ぎず、しかし愛情をもって子どもに接し、「指導者への感謝の気持ち」を教え、「自分で工夫して取り組む（自立）」ことを促せる力のことと言えます。言い換えれば、「子どもと指導者の良きサポーターに徹する能力」とでも言えるでしょうか。私は今までの指導経験から、「子育てや選手育成は周りの大人の関わり方次第」だと日々益々、その確信の度合いを強めています。

#### PROFILE

■渡辺真斗 TAKATO WATANABE



1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から厳しく空手の手ほどきを受ける。先代が病氣となったことから一大決心をして、養正館を継ぐ。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2014年、2015年と2年連続で全少7名入賞させる。道場経営でも、一道場で300名を超える大躍進。

日本空手道鴻志会空手道場養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12

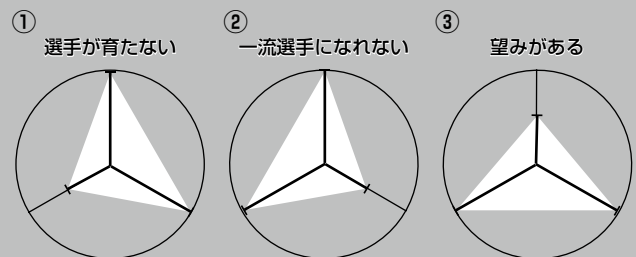
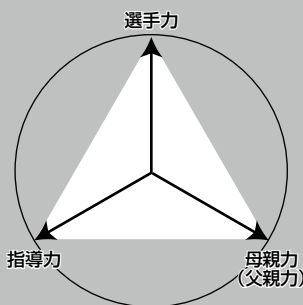
## Column

### 指導の三角形

指導は正三角形ができないと成立しないとよく言われます。つまり「指導者・選手・親」です。このどれもがひとつでも欠け、いびつな三角形となると、一流選手は育ちません。

①はいつまでたっても選手は育ちません。②は一時的に成績を出しますが、一流選手にはなりません。しかし、この中で、③だけが望みがあります。

初めは結果が出ませんが、次第に改善されていくことでしょう。子どもは周りの大人次第で変わって行くからです。よって、子どもの「選手力」が弱いのは、子どもではなく周りの大人が原因であることが少なくありません。



- ①選手力有り。母親力有り。しかし、「指導者」がやる気が無い。
- ②選手力有り。指導力有り。しかし、「お母さん」が指導者や子供に口を出し過ぎる、もしくは逆に無関心で非協力的。
- ③指導力有り。母親力有り。しかし、「選手」がやる気が無い。

#### 【養正館の「選手力」ベスト4】

- ★鈴木大輝くん(小1)：指導すると体をこちらに向け、うなずきながら「はい、はい」と返事をする。指導が終わると必ず「ありがとうございました」とお礼を言う。次もまた教えてあげたいと思わせる。
- ★丸山准菜さん(中3)：努力家であきらめない。指導者の気持ちを理解し、指導者の目線で意見を言う。
- ★江藤凧沙さん(小4)：真剣勝負で稽古に取り組んでいて、負けず嫌いで指導したことを次の稽古までに意地でも直してくる。試合への取り組み方は一流。
- ★芹澤理一くん(小3)：優勝してもおごることなく、親子で謙虚に指導者の指導を信じ、素直に稽古に臨む。